巻頭言

今，地に足をつけた作業の知識を作る時

坂上　真理

札幌医科大学保健医療学部

数年前から，作業科学への期待や関心が急激に高まっていると思う．本や研修会で作業科学の名前を見たり，聞いたりする機会が増えた．「作業科学を知りたい」「学んでみたい」という人々との出会いも多くなった．こうした流れと連動してか，お陰様で，気の合う仲間と細々と続けてきた OS 勉強会にも去年辺りからコンスタントに人が集まる様になった．

急激に OS が注目される様になり，最初は「ついに作業科学の時代到来！！」と随分舞い上がっていた．例えるなら，日の目を見なかった芸人さんが，急に数回，ラジオ番組への出演を依頼された時の感じだろうか．「どうやったら大衆受けするのか？」．自分自身があらぬ方向へズレ始めた時，急ブレーキをかけられる出来事があった．その後，冷静な目で周りを見てみると，「学んでみたい」の動機には幾つか種類や段階があることに気付く様になった．

“あたらしモノ好きな人”，“知識を広げたい人”，“OT にすぐ使える知識や武器が欲しい人”，“そこに OS があったから・・的な人”．

共通していることは，「OS は何かを持っている」と思っていること．でも，その「何か」はちょっと捉えるのが難しく，OS への期待や関心がどこか曖昧に見えることである．それは，その人たちが“OS は OT の理論やモデルではない”ことを重々承知している・・にも関わらず，なのである．

「･･･治療を行う前に解剖を理解しようとしない医師にあなたは治療されたいか？橋の構築を指揮する前に物理学，設計，建築学を勉強したくないエンジニアが設計した橋の上を運転したいだろうか？化学を勉強しない薬剤師による処方が欲しいか？･･･確かな専門家になることは特有のリーズニング過程に基礎科学の知識を用いることを意味する」(Pierce, 2003)

作業科学が作業療法のリーズニング過程に知識を与えることは確かである。

では，作業の知識はどれくらい蓄積されたのだろうか．

“OS の母は OT”と言われるが，OS は学際的な学問で，OT とだけ協働するのではない．しかし，今，OT をはじめとする人間の作業を支援する専門家から，リーズニング過程に用いる十分な量と確かな質を持った作業の知識が本気で求められているのは確かだ．学問としてのOSの真価が本気で問われている時にあると思えて仕方がない．先の，OS への期待や関心が曖昧に見えたのは，リーズニングに使える知識や知識の使い方を示す橋渡しの研究が圧倒的に不足していることも一因なのだと思う．

「今は，流れにのって，地に足をつけた作業の知識を作る時なのだ」．心の中の囁きを信じながら，慣れ親しんだ thinking の自分を捨て，DOING の研究者としてドキドキしながら物語を作り始めている．

Pierce D.(2003) Occupation by Design -Building Therapeutic Power, F.A Davis